

平成24年度部会活動功労賞 (部会CT賞)

「部会CT賞表彰にあたって」(入谷英司 部会CT長)

部会制が導入されて10年を経過し、化学工学会の中で、部会の果たす役割は、現在、ますます重要となっています。化学工学を専門分野毎に14の部会に分け、専門家集団としての部会が活発な活動を行い、化学工学会のアクティビティの源となり、様々な学会活動を支えています。秋季大会のシンポジウムをはじめ、国際会議やセミナー、講習会の開催など、多くの行事を通して、産学官の研究者・技術者の情報交換や教育の場が提供されています。これら部会の様々な活動は、部会員の皆様の努力に支えられているわけですが、とりわけ若手の方々の貢献は大きく、彼らが部会活動を事実上牽引していることによって、充実した部会活動が営まれているのが現状です。こうした努力に少しでも報いたいという趣旨で、一昨年度より若手の方を対象に、部会CT賞が設けられました。

今回は3回目の表彰となりますが、部会活動の活性化に特に顕著な貢献のあった以下の3名の方々を受賞者として選ぶことができました。秋季大会において、推薦母体の部会の各行事(部会シンポジウムや部会幹事会など)の中で表彰が行われました。受賞者の方々のこれまでの多大な貢献に感謝の意を表しますとともに、今後も部会や学会の活動に、ますますご支援いただきますよう、お願い申し上げます。

皆様の受賞を、心よりお祝い申し上げます。

1) 題目:「長年に渡る部会活動ならびに超臨界流体部会関連国際会議のHPの作成・管理・運営を通じた顕著な貢献」 東 秀憲氏(超臨界流体部会)

超臨界流体部会では、2003年から、超臨界流体部会員ならびに非会員への迅速な情報発信の場としてHP(ホームページ)を活用することを計画しました。当時、事務局であった東秀憲氏に、同HPの作成・管理を依頼し、2003年6月に公開を完了しました。公開当初は、同氏の当時の所属である九州大学にサーバーを設置し、サーバーの立ち上げに尽力いただくとともに、2006年9月の化学工学会共用サーバーへの移転に際しても、引き続き同HPの作成・管理を依頼することとなりました。

同氏は、積極的に掲載項目を追加し、更新回数も増加させ、レイアウト変更にも創意工夫を凝らしています。現在は、掲載内容・項目は著しく増大し、当時の数倍の規模に

なっています。特に、主催・共催行事や国際学会などの情報をいち早く発信することで、外部の非会員が超臨界流体部会に興味を持ったときに、その活動内容について理解する助けとなるように様々な工夫をしています。また、部会員に配布されているNewsletterや部会集会の議事録などを会員用ページに掲載することも、部会員増強の一助となっていると考えられます。また、2006年9月の化学工学会共用サーバーへの移転作業や、2008年9月の本部ホームページのリニューアルに伴う部会ホームページの見直し作業(2008年12月完了)の際にも、同氏の献身的かつ精力的な努力がなければ、現在のHPの機能を維持することができなかったと考えられます。

加えて、2009年10月に本超臨界流体部会と基礎物性部会が主導して金沢で開催した国際学会5th International Symposium on Molecular Thermodynamics and Molecular Simulation(MTMS'09:3年に一度開催される分子熱力学と分子シミュレーション分野の国際会議)のHPの立ち上げ・管理運営を一手に引き受け、2008年11月のHP公開以降、高頻度の更新による情報提供を行うことで、同会議の成功にも多大な貢献をしたものと考えています。

現在、Google、Bing(マイクロソフトの検索エンジン)、Yahoo! Japanといった各種サーチエンジンにおいて、「超臨界流体部会」を検索語とした検索を行った際に化学工学会の超臨界流体部会HPが1番目に表示されるようになっているとともに、年間に約2,000回の閲覧回数があり、これは同氏の貢献によるもの大きいと推察されます。

また、国際会議MTMS'09では、英文のHPを作成してタイムリーに情報を提供することによって、大きな混乱もなく、高い評価を得ることができたものと考えられます。また、その運営を専門業者に委託しなかったことは、学会運営に財政面でも寄与したものと考えられます。

超臨界流体部会のHPは、情報発信はもとより、Newsletterや部会集会の議事録などの活動記録を残すという意味でも意義深いものと考えられ、活動の記録や履歴を残して会員に周知して行くことで、過去の経緯を知るシニア会員と若手の間で生じる運営上の齟齬の解消にも一役担っているものと考えられます。

同氏はHPやWEBの専門家ではなく、研究分野に関連性がある訳でもなく、ボランティアとして、超臨界流体部会HPの維持・管理・運営に創意工夫を凝らし、長年に渡ってその活動を支援してきました。

以上の理由により、部会CT賞の受賞にふさわしいと認められました。

2) 題目:「様々な広報活動を通じた化学装置材料部会発展への多大なる貢献」酒井哲也氏(化学装置材料部会)

酒井哲也氏は、化学装置材料学会（設立2010年）だけでなく、その前身の化学装置材料委員会（発足1968年）の時代から会の運営活動に携わっており、中でも2010年に化学装置材料委員会を委員会組織から発展的に部会に移行した際において、委員会を前提にした組織運営を部会の活動に合う形に変更するための多大な準備を行い、また同時に進行的に公益法人化に伴う様々な事務的な対応を行うための対処についても中心となって行った人物であります。例えば定款や内規類の変更はその一例であり、また正会員が少なくほとんどが企業会員その他である中で、部会を運営するための資金のあり方など、旧委員会の大枠を残しつつ、現実性を持ったソフトランディングへ導いたのも同氏の貢献であります。化学装置材料部会は、旧委員会の性格をまだまだ引き継いでいるために、部会の執行部役の中では年齢が極めて若いにもかかわらず、本部会を支える役割を精力的に行ってきております。

また、本部会および移行前の委員会のホームページについても、開設時から現在に至るまで長期にわたり管理に携わり化学装置材料委員会および部会の広報活動にも貢献してきています。本部会の会員数も委員会当時は40名ほどでしたが、部会に移行後大きく増加して現在は112名と約3倍に増員しており、同氏の地道で精力的な広報活動がその一因と考えられます。

現在、化学装置材料部会は5つの分科会、すなわち腐食分科会、表面改質分科会、有機材料分科会、保全分科会およびクリープ寿命評価分科会を中心に研究を含めた様々な活動を実質的に行っております。この中で、特に同氏が副主査を務める有機材料分科会では、化学装置用有機材料の使用実績を化学工学会に所属している企業約150社を対象にアンケート調査を行い、得られた回答データを集計して、使用状況や有機材料が工場等の現場で抱えている問題について解析を行いました。この調査・集計作業および解析では中心的な役割を担い、この結果は化学装置用有機材料資料集X「2009年度化学装置用有機材料使用実績データ集」として資料集出版されるとともに、第7版化学工学便覧や2011年より同部会でも枠をいただいた化学工学誌の年鑑記事などにも引用されています。さらにこのアンケート調査は1999年にも行われており、同氏は学生時代にもこの調査に関する調査・集計・解析について作業を行っていることから委員会時代より長期にわたって大いに貢献しているものと考えられます。また、同氏は有機材料分科会が主催あるいは企画する“材料セミナー”、あるいは第76回および第77回年会の化学産業フォーラム等の行事においても、企画を含めた中心的な役割を担い、先のアンケート関連データに関する講演を行うだけでなく、司会・座長を務めて場を盛り上げるなどしてきました。

このように、同氏の移行期における多大な貢献は、本部会の創生期における活性化および会員増強に大きく貢献しました。

以上の理由により、部会CT賞の受賞にふさわしいと認められました。

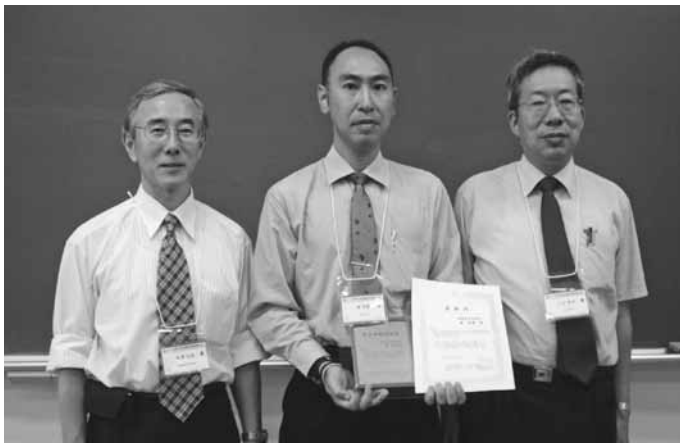
3) 題目：「部会活動およびプロセスデザイン学生コンテストの電子的支援システム作成における顕著な貢献」

木村直哉氏(システム・情報・シミュレーション部会)

木村直樹氏は、2008年度以降、システム・情報・シミュレーション部会(SIS部会)の主催するプロセスデザイン学生コンテストのホームページ担当であり、2010年度から2年間はSIS部会の事務局および庶務幹事を兼任し、部会内外への窓口として運営に携わり、SIS部会活動の活性化と部会の会員増強につながる部会内外への広報活動に顕著な貢献をされました。

同氏は、部会内の情報技術教育分科会の主催する「プロセスデザイン学生コンテスト」の活動においては、2008年の第40回秋季大会(東北大学)にて開催された第7回のコンテスト以来、現在も引き続き学生コンテストのHPを作成し、課題やその他のコンテスト関連情報の提供はもちろん、Webからの問い合わせシステム、課題の改訂等をメールアドレス登録者に通知する「お知らせメール配信システム」、参加学生のWebエントリーシステムや設計資料のWeb提出システムなどを独自に開発し、コンテストの円滑な運営と部会内外を問わず周知に努めてきました。また、学生から提出された設計結果を審査用資料として取り纏め、審査結果の集計等に尽力してきました。本コンテストは2010年から人材育成センターとの共催となり、2012年度には第11回を数えました。さらに、2009年度からは本コンテストに対する協賛企業を募り、協賛企業数は年々増加し、2011年度には13社を数えました。これらの協賛各社からは、プロセス設計などに実際に携わる社員を審査員として派遣して頂くなど、非常に活発かつ有意義なコンテストとなっています。コンテスト参加学生はもちろん、企業側からも高い評価を受けております。これも同氏の地道な活動が大きく寄与していることは間違いありません。

また、同氏は、2010年以降部会の庶務幹事として部会員宛のメールマガジンを積極的に整備・運用し、年10回以上の情報発信を行っています。特に、同氏が独自に開発したメールマガジン配信システムにより、メールのパーソナライズ(メール本文の1行目に会員名を表示)を実現し、メールマガジン実読率の向上が図られました。その結果、実際に会員からは「読むようになった」との声が聞かれ、実読率向上効果が得られています。また、メールマガジンに対するレスポンスも増え、加えてSIS部会員の受信者が部課内

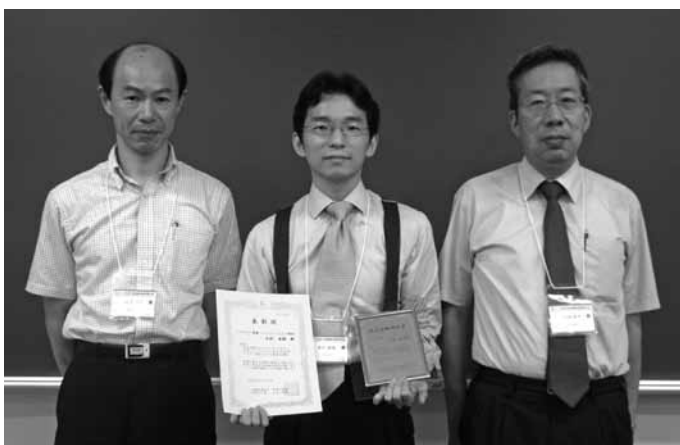


◀超臨界流体部会

(左から、後藤元信 部会長、東 秀憲 氏、入谷英司 部会CT長)
2012年9月19日 部会幹事会にて表彰

化学装置材料部会▶

(左から、久保内昌敏 部会長代理、酒井哲也 氏、
入谷英司 部会CT長)
2012年9月21日 部会長会議にて表彰



◀システム・情報・シミュレーション部会

(左から、山下善之 部会長、木村直樹 氏、入谷英司 部会CT長)
2012年9月20日 講演会場にて表彰

へ転送するなど、部会内外を問わず高い広報効果が得られるようになりました。

同氏は、庶務幹事の任期終了後、現在も引き続きHP担当として広報活動を担当しております。SIS部会では、5つの分科会に分かれて活動を行っていますが、各分科会で個別にHPを作成・管理するのではなく、SIS部会のHP担当が一括して作成するようにしており、これにより、分科会毎にばらつきがちなHPの情報量や質・デザインの統一を図っています。同氏の担当以来、頻繁かつタイムリーな更新により、部会員はもちろん部会外へも重要な情報発信手段となっています。

また、同氏の庶務幹事任期中には、SIS部会の継続申請

および学会の公益法人化がありました。継続申請においては、過去8年間の活動をまとめた資料(部会継続趣意書 添付書類)を提出する必要がありますが、散逸していた過去の資料を収集・整理し、必要に応じて電子化を行って、約450ページにわたる資料として取り纏めを行いました。公益法人化にあたっては、SIS部会内の規約および諸規程を整理し、規程の見直しや新設において中心的な役割を担いました。

同氏は、電子化支援システムの作成および運用を通じてSIS部会の部会活動活性化および会員増強において継続的かつ顕著な貢献をいたしました。

以上の理由により、部会CT賞の受賞にふさわしいと認められました。